

平成10（1998）年度発展途上国研究奨励賞の表彰について

アジア経済研究所は、昭和38年以来、発展途上諸国の経済などの諸問題に関する優秀論文の表彰を行ってきた。昭和55年には、「発展途上国研究奨励賞」として、この領域における研究水準の向上に一層資することを旨として、その対象を社会科学およびその周辺の調査研究事業の著作全般に拡大した。表彰の対象は、前年の1月から12月までの1年間にわが国で一般に入手できる形で公開された図書、雑誌論文、文献目録などで、発展途上国の経済、社会などの諸問題について研究し、また分析したものである。

平成10（1998）年度は各方面から推薦された31点を審査したが、最終審査で下記の作品が選ばれた。表彰式は6月24日に当研究所において行われた。

<受賞作>

『現代中国の党政関係』（慶應義塾大学出版会）

唐 亮（愛知学泉大学助教授）

<審査委員>

委員長：川野重任（東京大学名誉教授） 委員：玉尾豊光（野村総合研究所研究理事）、坪内良博（京都大学教授、大学院アジア・アフリカ地域研究研究科長）、中兼和津次（東京大学大学院経済学研究科教授）、原洋之介（東京大学東洋文化研究所長）、三露久男（朝日新聞社総合研究センター主査）、渡辺利夫（東京工業大学教授）

<最終審査対象作品>

最終審査の対象となった作品は受賞作のほか、次の5作品であった。

アジア経済研究所編『テキストブック開発経済学』（有斐閣）
加藤敏春・さくら総研『アジア・ネットワーク』（日本経済評論社）
厳善平著『中国農村・農業経済の転換』（勁草書房）
田中 高著『日本紡績業の中米進出』（古今書院）
柳原 透・三本松 進編『東アジアの開発経験——経済システムアプローチの適用可能性——』（アジア経済研究所）

唐 亮 著『現代中国の党政関係』について

ながねかつし
中兼和津次

改革開放以後、中国では多くの情報が公開されたが、政治関係のものはきわめて限られている。それは、中国では政治の多くの領域が依然として中国語でいう「禁区」(タブー)だからに他ならない。そうした厳しい制約のもとで、若い、しかも中国人である政治学研究者が敢えて現代中国政治の「秘部」である党と政府の関係に挑戦したことに対して、まず心から敬意を表したい。

「党が一切を指導する」中国では、あらゆる領域で党が人事権、とくに幹部任命権を通じてコントロールしているが、その実際の構造やメカニズムについてはこれまで明らかにされてこなかった。たとえば、旧ソ連における「ノメンクラトゥラ(職位階表)制度」に対応する制度が中国にあることは知られていても、これが実際どのように機能しているのか、政治学的に分析したのは本書が初めてである。あるいは、各行政単位に党グループや党小組なる組織があることは周知のことであるが、これがどのように政府をコントロールしているのか、そのメカニズムを具体的に整理し、それがいかに中国の権威主義体制を支えてきたのかを明らかにした

のは、私の知る限り本書が初めてである。国有企業における意思決定のあり方や、中央における投資計画作成の実態といった経済的に重要な問題も、こうした政治メカニズムが分からないと本当は理解できない。

もちろん、本書ならびに著者に対して希望をいえばきりがない。たとえば、旧ソ連と比較して中国における党政関係はどのような特徴があるのか、改革以後工場内の幹部任命権に実際党はどの程度関与し、任命過程で上部機関(党と政府)といかなるやりとりがなされているのか、あるいは外資系企業など非国有部門における党の作用はどうか等々、追究されるべき課題は多い。しかし、本書に示された著者のしっかりした問題意識、着眼点のよさ、それに力量をもってすれば、今後こうした方面にまで分析の範囲を広げていってくれそうである。今回の受賞を機に、唐亮氏の研究がさらに飛躍し、できたら(難しいかもしれないが)実態調査に基づいた克明な研究まで発展してくれることを期待してやまない。

(東京大学大学院経済学研究科教授)

●受賞の言葉——唐 亮

「改革と開放」政策の推進によって、中国の政治学研究の環境は少しずつ改善されました。特に、1987年の第13回党大会では政治改革の綱領を採択し、党グループ制度の廃止および「党の行政担当機構」の撤廃などの方針を打ち出してから、政治改革の議論は高まり、関連資料も各種の年代記、指導者の回想録および研究論文などの形で公開出版されるようになりました。資料は断片的なものが多かったのですが、それらを繋ぎ合わせて緻密に分析すれば、現代中国の権力体制とその運営実態は次第に明確になってきます。

1987年10月、わたしは慶應義塾大学に留学する機会を得ることができました。日本で社会科学の研究方法を学び、距離を置いて中国の政治世界を冷静に見つめ、日本政治を直接観察しながら中国政治を考えていくうちに、現代中国の権力体制をあらためて研究する必要性を強く感じるようになりました。そこで、わたしは現代中国の党政関係を博士論文のテーマに決め、それまでほとんど取り上げられなかった党グループ制度、「党の行政担当機構」と中国版のノーマンクラツラ制度と言われる「幹部の分部分級管理制度」の運営実態などを分析して、共産党がいかにして国家権力を支配し、社会全体に対し政治指導性を発揮してきたのかについて解明を試みました。本書は日本留学の成果であります。このたび「発展途上国研究奨励賞」を賜り、身に余る光栄と感じますと同時に、わたしの留学生活、研究生活を支えて下さった関係者の皆さまに深く御礼を申し上げたい次第でござ

います。

「上からの政治改革」のなかで、政治改革を動かすには中国知識人の力がいまだに不十分です。しかし、政治権力の構造、権力体制の運営実態、政治過程を解明して政治社会の透明度を向上させることは長期的には、政治制度の改善、民主主義の発展および社会公正の実現に寄与するに違いありません。この受賞を励みに、今後とも中国政治の研究に努めたいと存じます。

略 歴

1963年生まれ。83年、北京大学国際政治学系卒業。86年、北京大学大学院修士課程修了。87年、慶應義塾大学大学院留学。93年、慶應義塾大学大学院博士課程修了、松阪大学政治経済学部専任講師。95年、博士号（政治学）取得、松阪大学政治経済学部助教授。98年、愛知学泉大学コミュニティ政策学部助教授。

主要な著書と論文

- 「信息溝通与政府体制改革」（王志剛編『政府職能与機構改革』光明日報出版社 1988年）。
- 「試論人民群眾的決策参与」（『馬克思主義研究』1986年第3号）。
- 「中国の行政機関における党グループ」（『アジア研究』第38巻第2号 1991年12月）。
- 「中国共産党の行政担当機構」（『アジア経済』第33巻第9号 1992年9月）。
- 「中国共産党のイデオロギー管理——政治的機能とその変容——」上・下（『東亜』第326、327号 1994年8、9月）。
- 「政治改革と共産党の指導——党政分離の実態——」（日本国際政治学会編『国際政治』第112号 1996年5月）。
- 「改革期の中国における中央=地方関係——組織人事制度の分析を通して——」（『東亜』第370号 1998年4月）。